

平成27年度公立大学法人横浜市立大学の年度計画に対する各委員評価一覧

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための取組	9	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・PEを中心とする全学的な外国語教育の充実、少人数教育への取組み、医学部における2023年問題への積極的対応、授業・カリキュラムアンケートの継続的实施等を通じて教育の質の保証・向上のためのさまざまな努力が重ねられていることを評価。 ・機関別認証評価において教育の国際化に関し改善を要する点として「学内の取組状況を組織的に自己点検・評価」し、その「結果をフィードバックするための取組及び体制が十分とはいえない」と指摘されたことを真摯に受け止め、留学生受け入れを始め教育の国際化に関わる全ての事項を法人全体として総合的に判断し、戦略的に取り組む体制の強化を強く期待。 ・先端医科学研究センターの研究棟増築等により体制の整備が進み、また附属病院に次世代臨床研究センターが開設されたこととあいまって、将来の医療へとつなげるトランスレーショナルリサーチ推進体制が構築されたことを高く評価。
			A	
			A	
			A	
			A	
I-1 教育に関する取組	9	A	A	
			A	
			A	
			A	
			A	
I-1-(1) 全学的な取組	9			<ul style="list-style-type: none"> ・国際総合学部において領域横断的な教育プログラムの開発を進め、28年度からYCUグローバルスタディーズプログラムなど3プログラムの開始を決定したことは、社会のニーズを踏まえつつ教育の質向上を目指す取組みの一つとして評価。また医学部においてアクティブラーニングの積極的導入、教職員FDの充実等2023年問題への対応を踏まえつつ教育の質向上への取組みが意欲的に進められている。 ・高大接続改革実行プランや大学入試センター試験改革等現在国を中心に進められている入学試験改革の動向に即した本学としての個別入試の抜本改革への早い時期からの戦略取組みを期待。 ・図書館システムの更新を行い資料検索機能の向上等新たな機能を追加したことを評価。なお、グループワークスペースの充実を含め今後の大学図書館に不可欠なラーニングコモンズ機能の充実をさらに進めることを期待。 ・SGH連携大学として市内のSGH高校への協力を積極的に行い、また市立高校との重点連携3校に新しく市立南高校を加える等、地域の高校との連携を強化していることを評価。 ・アカデミックコンソーシアム事業が第6回を迎え、国際シンポジウム開催を始めSUDP、さくらサイエンスプラン等が効果的な連携のもとで実施され、国際的な学術、教育交流の深化が図られていることを高く評価。またこの事業の第2ステージに向けての運営体制の整備が進められたことを評価。さらにこのネットワークを活用したアジアのいくつかの都市との連携プロジェクトが積極的に進められている。 ・COC事業の中核となるべき地域実践プログラムの修了認定者が3人に留まっていることは残念。また年度計画に示されているとおり各学系における地域志向科目の全員履修に向けての努力を期待。学生への履修指導の充実を含め、より多くの学生が地域課題への実践的取組を学ぶ機会を、キャリア形成支援科目等とも関連しつつ、積極的に拡充することを期待。
				<ul style="list-style-type: none"> ・学位授与の基準の明確化が図られたこと、受講者数の適正化が図られたこと、質の高い学生確保のため種々の戦略が試みられ実績を上げたこと等、学生の質の確保に関わる種々の施策が実行された。アカデミックコンソーシアム事業が目指してきた各種プロジェクトが実現したことに加え、民間企業より協賛金の支援を受けたことは、今後の発展が大いに期待される。
				<ul style="list-style-type: none"> ・国際総合科学部において次世代カリキュラムの検討が進み、28年度から領域横断的な教育プログラムとして「YCUグローバル・スタディーズ・プログラム」他2つのプログラムがスタートすることを評価する。また全学部ともアンケート等を通してFDを進めるなど、より教育効果の高いカリキュラムへの改善に向けて引き続き取り組んでいる。
				<ul style="list-style-type: none"> ・アカデミックコンソーシアムの推進は、その具体的な活動と実績により、国際化というテーマでは、大きな成果と次期中期計画への期待を示した。

年度計画（項目）	頁	自己 評価	委員 評価	コメント
I-1-(2) 学部教育に関する取組	26			<p>・領域横断型教育プログラムとしての「YCUグローバルスタディーズ」の開講決定等国際化を強く指向したカリキュラムの検討が進められていることを評価。</p> <p>・また、PE単位修得率の向上、さらにAPE受講生数の増加等福浦キャンパスを含め全学的な英語教育の充実が進んでいる。また英語以外の初修言語受講者の増加がみられる等キャンパス国際化への意欲的な取組みが進んでいることを評価。</p> <p>・高大連携事業の一環として従来の高校教員に加え中学校教員を対象とした英語科教員研修を実施したことを評価。</p> <p>・高大院一貫型の理数系人材養成プログラムとして28年度以降も「理数マスター育成プログラム」の継続実施を決定したことを評価。優秀な学生の早期履修及び6年間一貫教育の促進を期待。</p> <p>・中期計画に掲げる通り、専門教養科目における国際的視野に立つ教育内容の充実にむけ、英語による授業の充実、海外大学等の遠隔講義、学事暦の大幅な弾力化等、国際的な視野で学ぶことができる環境の整備へのさらなる強力な取組みを期待。</p> <p>・マレーシア科学大学等との新規交換留学の開始等の努力を重ね短期及び長期の留学プログラム参加学生数が逐年増加の一途を辿っていることを評価。一方さまざまな要因によることとはいえ海外フィールドワーク参加学生数が最近減少傾向にあることは残念。その一層の充実、増加を期待。</p> <p>・海外からの留学生受け入れ数はやや増加の傾向にはあるものの本学の規模、実力に比して依然低いレベルにあることは残念。機関別認証評価において改善を要する点として「外国人学生の受け入れは、戦略的取組が不足している」ことが指摘されたことも踏まえ、医学部への受け入れも含め留学生によって選ばれる真に魅力ある大学づくりに向けて教育方法改革、生活支援充実への戦略的な取組み改善を期待。</p> <p>・看護学科において英語への向学心促進のため「アクティブラーニング型実用的看護英語プログラム」を企画し英語による臨床ロールプレイを実施したことは極めて意欲的な取組みであり高く評価。</p> <p>・医師及び看護師国家試験の高い合格率確保のためさまざまなきめの細かい努力を重ねていることを評価。また看護師の市域・県域医療機関、特に本学病院への高い就職率を確保していることを評価。</p> <p>・英語教育についてはPE単位修得率が73.4%と前年度を大きく上回り、APEを受講する学生が前年度比で約20%増加、更に初習外国語の受講者が増加し、英語以外の言語を学ぶ学生が増えている。福浦キャンパスのセンター設置により、PEの取得定着・APEによる英語教育の取組拡充について、27年度認証評価では高い評価を得た。新規交換留学・語学研修などが着実に実績を上げ、留学生の数と質の確保について様々な観点から検討が行われ、質の良い留学生獲得に繋がった。医学部の定員増加に伴う学力低下が心配される中、細やかな試験対策の結果、過去10年間で最高の合格率97.8%、全国順位6位の高合格率を得た。</p> <p>・27年度入学生のPE単位修得率が26年度より向上し、その次の段階であるAPEの受講率が2割増加しており、英語教育の実感があがっていると評価できる。大学機関別認証評価においても、優れた取組みと評価を受けている。</p> <p>・平成24年度から開始した文科省理数学生育成支援事業である「YCU型高校大院一貫科学養成プログラム」で初めての修了生7名を輩出し、28年度以降は「理数マスター育成プログラム」として引き続き実施することで、6年一貫教育と優秀な大学院入学者の確保の体制が整備された。更なる制度充実を期待する。</p> <p>・学生の海外派遣についての取組は評価できるが、留学生の受け入れについては年々減少しており、更なる取組が必要である。</p> <p>・きめ細かい対策と指導・分析の具体化により、医学部の国家試験合格率過去最高は評価する。PDCAが効果的にサイクルした好例である。</p>
I-1-(3) 大学院教育に関する取組	46			<p>・大学院生命ナノシステム研究科（前期、後期）及び生命医科学研究科（後期）の入学定員の確保ないし入学定員の再検討を行い、適正な学生数確保への努力を期待。</p> <p>・英語による授業科目を充実させJICA人材育成支援プロジェクト等により国際マネジメント研究科及び生命ナノシステム科学研究科に海外からの留学生を受け入れたことを評価。</p> <p>・年度計画に示されている生命医科学分野の再編に伴う医学研究科との教育研究の整理・再編の具体化が進んでいないことは残念。早い機会での具体的な取組みを期待。</p> <p>・高度専門看護職育成のためCNSの一層の充実を期待。またこれとあわせ、地域医療貢献に向けた高度看護師養成のための看護学博士課程の早期開設を期待。</p> <p>・大学院教育の根底には優秀な学生の確保が必要であるが、生命医科学研究科では学内推薦・学外推薦導入の結果、優秀な学生で博士前期課程の定員を満たすことができた。連携大学院では、連携の強化及び連携協定に向けて他機関からの講師を招き、特別講義を実施した。学部・大学院一貫教育については、教育効果の検証をしていく必要があり、依然として残る問題は後期課程の定員充足である。定員を減らすことは簡単であるが、研究推進のためにはある程度の人数を確保する必要がある。</p> <p>・生命医科学研究科では、博士前期課程は定員を確保したが、後期課程については定員を満たすことができなかった。</p>

年度計画（項目）		頁	自己 評価	委員 評価	コメント
	I-1-(4) 学生支援に関する取組	54			<ul style="list-style-type: none"> ・授業料減免制度の積極的運用に努め学生のニーズに応えていることを評価。今後とも所要財源の確保を期待。同時に、優秀な学生確保の観点も含め、市大として独自の給費性奨学金制度の創設を期待。 ・なお、学びのサーフティネットの確保の観点からJASSO奨学金を積極的に活用することは意義あることであるが、貸与制には必ず返還の義務が伴うことの周知徹底を期待 ・交換留学生用宿舎として市の国際学生会館利用を開始したことを評価。今後増加が見込まれる留学生の宿舎確保のためにも年度計画に定めるシェアハウスシステムの早期構築を期待。 ・また留学生支援の一環として留学生を対象とする授業料減免制度を定着させるとともにその一層の充実を進めるべき。 ・メンタルヘルスや各種ハラスメント等に関する学生の心身ケアの一環としてキャンパス内に多くの相談窓口が開設されていることは評価するが、そうした悩みの性格上他の学生等の目につかない学外にも学生が気軽に相談できる窓口を開設することが望ましい。 ・短期及び長期の留学プログラム参加学生数が着実に増加しつつあることを高く評価するが、海外派遣プログラムへの参加者割合が中期計画の目指す15%の約半分（8%）に留まっていることは残念。海外インターンシップや海外ボランティアへの参加者増に向けて一層の支援を期待。 ・国内外での学生ボランティア活動の一層の活発化のためボランティア支援室がさらにその機能の充実、拡大を進めることを期待。
					<ul style="list-style-type: none"> ・学生支援に関する成果はあまり感じられない。経済的支援である授業料減免については広報活動を強化した結果、学生のニーズを充足させ、学生の獲得・休退学回避に一定の効果をもたらした。保健管理センターの広報により、メンタル不調者と疑われる学生が増加し、“キャンパス相談”と名称を変えて対応を強化していく。就職支援では「卒業生紹介冊子」を作成、OB・OG訪問の情報提供に繋げた。留学生支援では、交換留学生の受入増に対する環境を整備した。以上の項目に対して評価した。
					<ul style="list-style-type: none"> ・合同企業セミナーへの出展企業に本学の評価アンケートを実施して本学学生の印象の情報を収集したり、「卒業生紹介冊子」を作成したりと、キャリア支援の充実をはかっている。 ・八景キャンパスでは、本校舎の耐震補強工事、YCUスクエアの建設により、学生の学習環境の向上が進められた。
	I-2 研究の推進に関する取組	62	A	A	
	I-2-(1) 研究水準及び研究の成果等に関する取組	62			<ul style="list-style-type: none"> ・教育研究に関わる外部資金獲得額に引き続き努め受入総額では3,961百万円と前年度比約2億円増となったことは評価するが、科学研究費補助金受入額がここ数年逡減傾向にあることは残念。充実した大型研究への一層の取組みを期待。 ・産学官連携の一層の推進のためURA推進室を設置しURA2名体制で外部資金獲得等の研究支援活動を開始したことは大いに評価できる。URA推進室の更なる充実を進め研究支援の強力な推進を期待。 ・地域における各種ワークショップの開催、地域志向科目の選択必修化等を含めCOC事業の実質化に着実に取り組んでいる。またそうした地域貢献活動への取組み実績等を明らかにした地域貢献白書を発行したことを評価。 ・旭区を含む市内すべての区でのエクステンション講座開催が実現したこと、また一部の講座とはいえ動画配信を実施したことを評価。 ・研究成果の社会還元に関連し、機関別認証評価において教員の「研究活動の状況を把握する全学多岐な体制が十分でない」と指摘されたことは極めて残念。教員のResearchmapへの入力徹底はもとより研究者情報の全学的集約とその積極的発信へのさらなる全学的な努力を期待。
					<ul style="list-style-type: none"> ・4月に設置されたURA推進室の学内浸透が外部研究費獲得への意識向上に繋がり、支援体制の下で実現することを期待する。H27年度の外部資金獲得状況はやや低迷しているように見受けられた。大学COC事業において地域志向教育を推進した結果、その教育体制が固まって来た。教員による生涯学習の120講座が開講されるなど、多くの教員が地域貢献活動支援事業に取り組んだ。
					<ul style="list-style-type: none"> ・「産学連携推進本部」において本学の研究力分析を行い、戦略的推進事業だけでなく、基礎研究力強化に向けた学術的研究推進事業を28年度より立ち上げることになったことを、目先の成果だけにとらわれない長期的な視野に立った施策として評価する。 ・URA推進室設置等研究の支援に継続して取り組み、毎年のように外部獲得研究費の増加を達成してきていることを評価する。

年度計画（項目）		頁	自己 評価	委員 評価	コメント
I-2-(2) 研究実施体制等の整備に関する取組	70				<ul style="list-style-type: none"> ・先端医科学研究センター研究棟増築が完成し、新しく開設された次世代臨床研究センターとともにシーズ開発型の研究を通じたトランスレーショナル研究推進体制が整備されたことを高く評価。 ・産学官連携の一層の推進のため、27年度から学長を室長とするUR A推進室を立ち上げ2名の特任教員の配置を決定したことを高く評価。
					<ul style="list-style-type: none"> ・先端医科学研究棟の整備により先端医科学の核となるセンターが集約され、遺伝子レベルからたんぱく質、細胞レベル解析を経て、疾患モデル動物による解析を一貫して行う高度解析技術の開発及び支援体制が大幅に充実した。今後先端医科学の中心的研究拠点として発展することを期待している。
					<ul style="list-style-type: none"> ・先端医科学研究棟の増築が竣工し、センターの核となる4つのセンターが集約されたことにより、高度解析技術の開発及び支援体制が充実したことを評価する。
					<ul style="list-style-type: none"> ・先端医科学研究棟増築のしゅん工により、支援体制充実、インフラ整備のみならず、効果的PR等により、市大のブランドアップに大きく寄与した。
I-3 教育研究の実施体制に関する取組	74	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい教育手法の開発や教育一層の質的向上を図る一環として、新たに学内GP事業を行うこととし採択3件、補助1件を決定したことを評価。今後も継続的な実施を期待。 	
			A	<ul style="list-style-type: none"> ・生命ナノシステム科学研究科における「YCU型高大院一貫科学者養成プログラム」を中心とした6年一貫教育の進捗を見守りたい 	
			A		
			A		
			A		
II 附属2病院（附属病院及び附属市民総合医療センター）に関する目標を達成するための取組	76	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・センター病院における横浜市重症外傷センターの本格運用開始をはじめ、引き続き各種の政策的医療への積極的取組を進めるとともに、附属病院での手術支援ロボットの導入、センター病院でのハイブリット手術室の整備等、医療機能の高度化を進めていることを評価。 ・さまざまな事情のあることとはいえ両病院とも費用が収益を上回り赤字決算となったことは残念。適正な収支バランス確保のため短期、長期双方の効果的な取組みを期待。 	
			A		
			A	<ul style="list-style-type: none"> ・附属病院・センター病院とも、「がん医療」「救急医療」「災害時医療」等の医療機能を果たす中核的病院として、その役割を果たしている。 	
			A		
			A		
II-1 医療分野・医療提供等に関する取組	76	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・がんを始め各種の政策的医療への取り組みを着実に進め、特にセンター病院で本格運用を開始した重症外傷センターで外傷患者の初期治療の迅速化が進められ重症外傷患者の早期治療が可能になる等の成果を挙げていることを高く評価。また高度救命救急センターでホットラインによる高い救急応需率を達成したことを評価。 ・両病院とも地域がん診療連携拠点病院として市条例に掲げる総合的ながん対策推進の強力な担い手として大きな役割を果たしている。 ・引き続き先進医療の積極的推進に努め、新たに附属病院で2件、センター病院で1件の先進医療の承認を受けたことを評価。また附属病院において手術支援ロボット（ダビンチ）の活用、化学療法センターの安定稼働等を通じて高度、先進的ながん医療を進めていることを評価。 ・地域医療連携機能の充実に向けて、連携病院、連携機関の拡充に努めていることを評価。なおセンター病院の紹介率が中期計画に掲げる90%に達していないことは残念（83.1%）。 ・地域医療機関とのより円滑な連携を図るとともに患者の利便性向上に資するため、両病院とも入院事務の受付・調整窓口の一元化の準備を進めていることを評価。早期の本格運用開始を期待。 ・両病院における治験・臨床研究を支援するため次世代臨床研究センターY-NEXTを開設し、附属病院において国家戦略特区による特例対象医療機関の認定や先進医療Bの認定等を得たことを評価。 	
			S	<ul style="list-style-type: none"> ・2病院ともがん治療、救急医療、災害時医療の推進に取り組んだ。手術支援ロボットの活用や化学療法センターの治療件数の増大と副作用による緊急時の適切な処置を可能とする医療機能の充実（附）、がん診療総合支援室が設置された（セ）など、がん医療が更に推進した。救急医療では、特にセンター病院の横浜市重症外傷センターで初期治療の迅速化により重症外傷患者の早期治療が可能となったほか、医師の育成・医療水準の向上が図られた。附属2病院では各診療の内容の役割を分担し、特色を明確にして、併せて1, 300床を超えるメリットを発揮している。 	
			A	<ul style="list-style-type: none"> ・附属病院・センター病院とも、「がん医療」「救急医療」「災害時医療」等の医療機能を果たす中核的病院として、その役割を果たしている。 ・先端医科学研究への取組として、次世代臨床研究センター開設等、治験・臨床研究の支援体制整備に取り組み、附属病院が国家戦略特区を活用した「保険外併用療養に関する特例対象医療機関」の認定や先進医療Bの認定を受けたことを評価する。 ・地域医療機関との連携強化も順調に進められている。 	
			A	<ul style="list-style-type: none"> ・【セ】Sについて：救命救急センターについて、26年の応需率が95.5%で、27年の実績96.8%は概ね前年と同等と見做せるので（この値そのものは誇ってよいでしょうが）、計画と実績からは「S」とするよりも「A」で充分と考えます。横浜での三次救急機関の目標が80%であれば「S」でしょうが。「評価の視点」に係ります。YMAT21回も同様に評価の視点に係ります。 	
			A		

年度計画（項目）	頁	自己 評価	委員 評価	コメント
II-2 医療人材の育成等に関する取組	85	A	A	<p>・看護師の育成から生涯学習までの幅広いキャリア開発推進の中心組織を目指す看護キャリア開発支援センターが設置され、実習や学生に関する情報交換、病院看護部と大学看護学科との連携の充実による学生の就職支援等が図られるようになったことを評価。優れた看護師の育成支援にさらにその機能を充実していくことを期待。</p> <p>・臨床研修医育成のための努力の一環として両病院とも初期臨床研修医の採用における基本プログラム定員のフルマッチを達成したことを高く評価。</p> <p>・効果的な臨床研修指導体制の強化のため、研修医の相談役となるメンターを年度計画に定めるとおり配置されたい。</p> <p>・センター病院で看護師の院内・院外研修の充実に努め、それぞれ3名の看護師が認定看護師及び専門看護師の認定を受けたことを評価する。</p> <p>・患者支援の充実及びスタッフの労働環境改善の一環として、附属病院で警備アドバイザーの雇用を決定したこと、またセンター病院で総合患者サポートセンターの位置づけを患者と医療者の橋渡し役として明確化したことを評価。</p> <p>・採用試験方法の改善、大学看護学科との連携強化を進める等看護師の安定確保に努め、病院全体の採用充足率が大幅に改善されたことを評価。</p>
		A	S	<p>・初期臨床研修医の採用において採用試験の回数を増やすなど各種取り組みの結果、両病院において基本プログラム定員のフルマッチを達成した。センター病院では自習用パソコンの更新等トレーニング環境の充実を図った。看護キャリア開発支援センターを設置し、2病院看護師と看護学科の連携協力の充実を行った。このような取り組みにより、センター病院では皮膚・小児看護等計6名の専門看護師及び認定看護師が新たに誕生した。院内保育所の運営・育児部分休業制度の活用により、育児と研修の両立支援、「女性医師支援枠」の活用を促し、希望者の採用を行う等女性医療スタッフの復職支援を行った。</p>
		A	A	<p>・「看護キャリア開発支援センター」を設置し、看護学科との連絡を密に行ったことで、看護職全体の採用充足率が改善したことを評価する。</p>
		A	A	<p>・研修医採用のマッチングについて産科・小児科プログラムについて26年度25%が27年度50%と「100%増し」なので【附】Sなのではないでしょうか。一方、【セ】Sは100%が続いたからではないでしょうか。計画は100%を目指すこととしたのですから、結果は「A」で十分に思います。ここも評価の視点に係ります。都市部の大学病院で100%は驚くほどの値ではないと考えます。</p>
		S	S	<p>・施策が順調に実施、強化され、マッチング率の達成は素直に評価したい。</p>
II-3 医療安全管理体制・病院運営等に関する取組	92	A	A	<p>・効率的な病床運用に努力し、病床利用率の向上、平均在院日数の減、手術件数の増加等が進んでいるが、附属病院の病床利用率が中期目標値（90%以上）に達していないことは残念（86.3%）。</p> <p>・厳しい勤務環境にもかかわらずスタッフの超過勤務の縮減に取り組んでいるが、両病院とも結果的に看護部門を除き事務、コメディカル両部門において超過勤務時間数が大幅に増加していることは大変残念。人件費比率の適正化及び職員のワークライフバランスの確保のため、さらなる改善への努力を期待。</p> <p>・両病院とも医薬材料費比率の改善が進まず、中期目標値（33ないし33%未満）に達していないことは残念。一層の努力を期待。</p> <p>・以上のような事情も含め両病院とも費用が収益を上回り、赤字決算となったことは遺憾。適正な収支バランス確保のための長期及び短期双方の効果的な取組みを期待。</p> <p>・東京オリンピック・パラリンピック開催、グローバル化の進展等を踏まえ看護師等のスタッフの多言語対応能力の向上は喫緊の課題。職員の自主的取組はもとより法人全体としての積極的取組を期待。</p>
		A	A	<p>・附属病院では「医療の質向上センター」を中心としてチームステップス研修を行ったほか、鎮静マニュアル作成・CVC講習会・研修を実施した。厚生労働省による集中検査を受け、その結果を踏まえた医療安全管理の改善策をまとめる等、医療安全管理の取り組みに励んだ。センター病院では、医療安全に関するeラーニングを実施し、職員の安全管理意識向上を推進した。病床等の運用に関しては、病床利用率86.3%（附）、89.6%（セ）は中期計画目標（90%以上）をやや下回っているがほぼ近く、平均在院日数14.6日（附）、13.2日（セ）は目標値（15日未満）をクリアしている。</p>
		A	A	<p>・医療安全に関する取組みや、医療法改正による医療事故調査制度の運用開始に向けた取組みが行われている。過去に医療事故が何度か起きているため、今後とも引き続き医療安全管理体制強化に取り組んでいただきたい。</p> <p>・経営の効率化については、現場は努力されていると思うが、平均在院日数こそ目標値を達成しているが、病床利用率、医薬材料費比率は両病院とも未達成かつ悪化、人件費比率も附属病院は未達成という結果となったのは残念。特に決算で両病院とも赤字になったのは遺憾である。決算数値の悪化については、消費税率アップ、高度先進医療の増加等、種々の要因が考えられるが、これらの要因については今後さらに厳しくなると考えられるため、このままでは赤字が常態化しかねない。内部留保があるため法人の存続について今すぐどうこうということはないが、第3期中期計画では経営改善に向けた抜本的な取組みが必要と思われる。</p>
		A	A	<p>・【附】Sについて：県下3病院云々は「遅きに失する感大あり」です。国立私立いずれのグループも何年も前からやっています。急に連携グループに入ったので「S」では困ったものです。また、厚生労働省による集中検査は対応することが求められる水準です。これも「S」に該当する特記事項にはなり得ません。医療安全文化は総じて「A」が妥当と考えます。</p>
		S	S	<p>・スタッフの確保、労働環境の整備により、必要人材の確保と離職防止が改善した。具体的対応と結果を大きく評価する。</p>

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ 法人の経営に関する目標を達成するための取組	104	A	B	<ul style="list-style-type: none"> ・給与改定に伴う人件費増、病院情報システム更新等による減価償却費の増等のさまざまな要因があったこととはいえ、法人全体として公立大学法人化以降初めて赤字決算となったことは大変残念。今後さらにいくつかの費用増加要因が予想されるなか、特に両病院の収支バランスの健全化に向けてさらなる努力を期待。 ・過去の事例とそれらを踏まえたさまざまな努力にもかかわらず教職員による重大な規律違反が相次いで明らかになったことは極めて遺憾。コンプライアンス意識の徹底、強い人権意識に基づくハラスメント絶滅に向けて、全組織・全構成員が強い危機感と責任感を持って、かかる事態の根絶に向けて抜本的な取組みを進めることを強く期待。
			A	
			A	
			A	
			B	
Ⅲ-1 業務運営の改善に関する取組	104	A	B	
			A	
			A	
			A	
			B	
Ⅲ-1-(1) ガバナンス及びコンプライアンスの強化など運営の改善に関する取組	104			<ul style="list-style-type: none"> ・度重なる通知発信、各種研修等の実施にもかかわらず、職員の指定薬物輸入疑惑による職員の逮捕、職員の無許可副業従事の発覚等の重大な不祥事が相次いだこと、また教員の学生に対する重大なハラスメント事案が発生したことは極めて遺憾。従来の発想を改め、コンプライアンスを徹底し、人権を尊重する組織風土の確立のための抜本的な取組みを期待。 ・第3期中期計画の策定に向け、学内で計画の策定に関する考え方を取りまとめ、「YCU法人News」で策定状況を周知するなど、大学の方向性の共有や学内コミュニケーションの一層の向上を図るのに加え、教職員が計画策定に参画できる組織風土の構築に努める。コンプライアンス推進体制の強化を図るため、各種通知の発信や教職員を対象とした研修を実施した。学内のハラスメント防止に向け、教職員・新生に啓発用パンフレットを配布し、研修を実施した。「公的研究費の適切な執行の確保」を重点項目として内部監査を徹底的に行い、監査報告書を学内に配布、周知徹底及び改善を図った。 ・コンプライアンス遵守やハラスメント防止について研修等意欲的に取り組んでいることは評価できるが、28年度になって4件の違反者が明らかになったことは非常に遺憾である。研修やマニュアル整備も重要だが、違反しにくい職場環境の構築や、違反事例が速やかに法人本部に報告される体制の整備が必要と考える。内部通報制度委員会等既に整備されている制度の実効性検証を含め、再度見直しされることを期待する。 ・議論・周知の域を出ず、具体的仕組みづくりに至っていない。対応が対処療法に過ぎず、抜本的対策（組織、仕組み）が必要。

年度計画（項目）		頁	自己 評価	委員 評価	コメント
Ⅲ-1-(2) 人材育成・人事制度に関する取組		106			<ul style="list-style-type: none"> ・大学運営の一層の活性化に資する観点から教員評価制度の改善に取り組んでいることは理解できるが、中期計画に定めるようにそれは具体的に「教員のモチベーションの向上に繋がる」ものであるべきことはいままでもなく、その点の具体的検討を次年度に持ち越したまま新しい制度の運用開始を決定したことに疑問を持たざるを得ない（この点に関連し、機関別認証評価では教員評価の「結果を特別昇給等に反映している」ことが優れた点として特記されている）。 ・教員のサバティカル制度についてサバティカル期間中の講義代替措置について予算運用面での整理を行ったことを評価。この措置により制度活用者の増加を期待。 ・教員が本学以外の他の機関で活動する場合のルールを明確化する「クロスアポイントメント制度」を導入したことを評価。 ・JICAの専門家派遣事業による2名の派遣を除き、本学教員の研究者ないし専門家としての海外派遣件数がゼロに留まっていることは極めて残念。アカデミックコンソーシアム事業の活用等を含め海外大学等への派遣機会の拡充への努力を期待。 ・職員に対する人権研修や障がい者理解研修を実施したこと、また「女性の活躍推進に関する行動計画」を策定したことを評価。
Ⅲ-1-(3) 大学の発展に向けた整備等に関する取組		110			<ul style="list-style-type: none"> ・金沢キャンパスに完成したYCUスクエアは学生の利便性・快適性の向上に大きく寄与するユニークな施設であり高く評価。 ・防災対応の一環として、有事の際に効率的に安否確認ができる「安否確認システム」を導入したことを評価。 ・生命医科学分野において理研をはじめ多くの国立研究機関や大学との連携が活発に行われていることは評価するが、その他の分野を含め中期計画の目指すダブルディグリーや共同学部の設置といったさらに積極的な大学間連携への取り組みが十分に行われていないことは残念。 ・耐震補強工事はほぼ予定通り完了し、参集訓練・「安否確認システム」の導入及び訓練の実施等、災害時への対応を進めている。更に省エネを目指す環境対策への認識が高まり、時代を反映した環境整備が実現しつつあることを評価したい。
Ⅲ-1-(4) 情報の管理・発信に関する取組		114			<ul style="list-style-type: none"> ・大学ポータルで定められている項目だけではなく、公開すべき情報項目の検討をさらに進め、社会が真に求める情報の公開にさらに積極的に取り組むことを期待。 ・卒業生向け広報誌「YCU通信」の発行、ホームカミングデー行事の充実等卒業生との連携強化に積極的に取り組んでいることを高く評価。またこれらの取り組みの成果として卒業生からの寄付金が増加傾向にあることを評価。更なる取り組みの強化により一層の増加を期待。 ・個人情報の管理は全学一致して慎重に行っていただきたい。卒業生は物心ともに母校を支える重要なステークホルダーであるので、常に大学の近況を発信していく必要がある。同窓会組織との連携を強めて行くことをお勧めする。 ・卒業生向け広報紙の創刊、大学HPの卒業生向けページの更新等、卒業生との関係強化についての取組を評価する。また、SNSでの情報発信も進められた。 ・産学連携、シーズ紹介イベントに5件出展し技術シーズや研究成果の積極的なPR活動を行ったことにより、共同研究企業候補の発掘等一定の効果を得たことを評価するとともに、今後も継続されるよう期待する。

年度計画（項目）		頁	自己 評価	委員 評価	コメント
III-2 財務内容の改善に関する 取組	117	A	A		
			A		
			A		・経営の効率化については、現場は努力されていると思うが、平均在院日数こそ目標値を達成しているが、病床利用率、医薬材料費比率は両病院とも未達成かつ悪化、人件費比率も附属病院は未達成という結果となったのは残念。特に決算で両病院とも赤字になったのは遺憾である。決算数値の悪化については、消費税率アップ、高度先進医療の増加等、種々の要因が考えられるが、これらの要因については今後さらに厳しくなると考えられるため、このままでは赤字が常態化しかねない。内部留保があるため法人の存続について今すぐどうこうということはないが、第3期中期計画では経営改善に向けた抜本的な取組みが必要と思われる(再掲)。
			A		
			B		・人件費増を前提とした、その他経費の効率化の工夫、予算策定時の検証に甘さが感じられる。赤字の危機感を具体的にどう施策展開して黒字化するのか今後議論したい。
III-2-(1) 運営交付金に関する 取組	117				
III-2-(2) 自己収入の拡充に関する 取組	117				・卒業生からの寄付金の受け入れ増加に向けてさまざまな努力を重ね、寄付件数及び寄付金額が増加傾向にあることを高く評価。今後とも更なる増加への努力を期待。 ・海外出張補助事業についてその目的をさらに明確にするため「若手・女性研究者研究奨励プログラム」と改めることを決定したことを評価。
					・卒業生に広報紙「YCU通信」とともに振込用紙を入れて発送するなどの取り組みにより、昨年比約3倍の件数の寄附が集まった。卒業生との絆の大切さがわかる。外部研究費の獲得は大学の収入増に寄与するのみならず、研究活動の基盤でもあり、研究者は意欲的に外部研究費の獲得に力を注ぎ、大学の研究活動を活性化して欲しい。
					・寄附への呼びかけ方法を工夫した結果、寄附件数が前年度の約3倍に増えたことを評価する。 ・UR A推進室設置等研究の支援に継続して取り組み、毎年のように外部獲得研究費の増加を達成してきていることを評価する(再掲)。
III-2-(3) 経営の効率化に関する 取組	120				・人件費比率の適正化、超過勤務時間数の減少にさらなる努力を期待。 ・次年度教職員配置の見直しによる採用・昇任、超過勤務縮減のための時間管理などにより、人件費抑制の取り組みがなされている。職員の業務理解を深めたことも、事務の効率化に繋がるものと思う。
					・計画と実績内容が具体的でなく、計画段階での実績と効果が不明。テーマの本質の徹底的議論が必要と感じる。
IV 自己点検及び評価に関する目標 を達成するための取組	122	A	A		
			A		・自己点検評価書を提出、認証評価を受け、比較的良い評価を得ることができたのも、毎年行われる法人評価を真摯に受け止めている成果と言える。
			A		
			A		
			A		

■備考（総合的な評価コメント等）

・第2期計画期間も1年を残すのみになり、第1期に引き続いて教育、研究、附属病院運営等大学活動の多くの部分にわたり、理事長の優れたリーダーシップのもとさまざまな工夫、努力が重ねられ、全体としてほぼ順調に中期計画達成の目途が立ちつつあることを評価する。

・国際都市横浜の設立する大学として、大学全体のグローバル化は極めて重要な政策課題である。P・E・A・P・Eプログラムの充実を始め、アカデミックコンソーシアムの推進等による外国の大学との連携強化、市大生の海外派遣等の取組みが着実に進められていることは評価するが、一方で海外からの留学生数はなお低いレベルにあり、外国籍教職員の在籍数比率もほとんど改善されていない等の課題が山積している。

このことと関連し、機関認証評価において、改善を要する点として「外国人学生の受け入れに戦略的な取組みが不足している」、「教育の国際化に関する学内の取組状況を組織的に評価し、フィードバックする取組み及び体制が十分でない」という趣旨の指摘がなされている。

これらの指摘の趣旨を踏まえ、第3期計画期間においては、今期中期計画が目指した英語による授業の大幅拡充、海外大学との遠隔講義の開設、さらには学事暦の大幅柔軟化、留学生宿舍の抜本的整備等を含め、大学グローバル化推進のための総合戦略の立案及びその確実な実施のための法人を挙げての強力な推進体制の確立を強く求めたい。

・過去の事例及びそれらを踏まえたさまざまな努力にもかかわらず、教職員による重大な規律違反が相次いで明らかになったことは、これまで長年にわたり培われてきた大学に対する社会的信頼を根底から揺るがしかねない異常事態であり、極めて遺憾である。コンプライアンス意識の徹底、強い人権意識に基づくハラスメント絶滅に向けて、全組織・全構成員が強い危機感と責任感をもって、かかる事態の根絶に向けて抜本的な取組みを進めることを強く期待する。

・さまざまな要因があったこととはいえ、法人全体として、公立大学法人化以降初めて赤字決算を計上したことは残念である。今後さらにいくつかの費用増加要因が見込まれるなか、特に両病院の収支バランスの健全化に向けてさらなる努力を期待する。

・優秀な人材の確保（戦略的な入試の実施に向けた入試調査部会の設置）
・国際化の推進（新規交換留学の開始等留学プログラムの充実・海外学生との交流・語学研修など学生海外派遣の推進）
・学生の外国語力の躍進（PEの単位取得の向上・APEによる英語教育の取組拡充・英語以外の外国語を学ぶ学生の増加）
・医科学分野における高度解析技術の開発及び支援体制の充実（先端医科学研究の核となる4センターが集約された）
・医療人材育成取組の成果（臨床研修医の基本プログラムのフルマッチ達成・専門看護師の育成）
などが評価される。

一方USBフラッシュメモリーの紛失など、大学自体のコンプライアンスに厳粛な反省と対策を求める。

・全体としてほぼ順調に年度計画を実施している。特に研究の推進に関する取組は成果を上げておりと評価できる。教育の質に関しても取組が進められており評価できるが、留学生の受け入れに関する更なる取組が必要である。また、病院に関する取り組みでは、地域の中核病院として求められている機能の充実が図られていることは評価できる。その一方で経営赤字の問題、並びに両病院の運営交付金割合の差による経営収支の差の問題は未解決のまま残っており、今後の取組が求められる。業務運営についてもおおむね計画通り実施されているが、コンプライアンスやハラスメントに関する不祥事が時折発生する点について、更なる取組を求めたい。

・大学の教育研究等の向上のための具体的な取組は全体として良好。学部ごとにPDCAの統制が機能していると思われる。附属2病院も同様である。

・しかし一方、学校経営にかかる取組は、まだまだ組織・学部横断的に改善すべき点がベースに存在しているのではないかと。「タテ」は機能するも、ガバナンスを含めた「ヨコ」の改善、強化が必要と思われる。